

南九州の古墳時代人に認められた癒合歯

Fused Teeth in a Protohistoric Kofun Skeletal Remain from Southern Kyushu

下野 真理子・竹中 正巳

Mariko Shimono, Masami Takenaka

キーワード：癒合歯，古墳時代人骨，南九州，地下式横穴墓

1. はじめに

歯の形態や形成の異常の一つに癒合歯がある。現代日本人における癒合歯の出現頻度は、乳歯では約2～5%^{1)~3)}、永久歯ではその1/10^{4)~6)}といわれており、歯の形態異常の中では出現頻度は高くはない。

2011年に出土した宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群2011-2A号墓1号人骨（男性・壮年）に癒合歯が確認された。この癒合歯は下顎右側切歯と同右犬歯の間に生じたもので、癒着歯，双生歯との鑑別を行い，癒合歯と確定診断したので，その結果を報告する。

また，本人骨の下顎左側切歯は先天的に欠如しており，これについても癒合歯との関連性について簡単に言及する。

2. 資料および方法

観察した人骨は宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群2011-2A号墓1号人骨（男性・壮年）である（図1・2・3・4）。本人骨は2011年12月に出土した。

地下式横穴墓は古墳時代の南九州の東部地域の在地民が営んだ墓制であり，菓子野地下式横穴墓群は古墳時代後期に造営された墓群である。本人骨の出土した2011-2A号墓（3体埋葬）は2011-2B-号墓（1体埋葬）と堅抗を共有していた（図2）。堅抗を共有するこのような地下式横穴墓はまだ2例しか確認されていない。

癒合歯および先天欠如歯の観察は肉眼およびX線写真撮影による観察にて行った。

3. 観察結果と考察

・下顎右側切歯と同右犬歯の間の癒合歯（図5・6・7）

癒合歯は2本または数本の歯胚が合体したもので，その合体の時期によって，歯冠も歯根も一体のものから，歯冠の一部だけが分かれているもの，歯冠が完全に分かれて歯根部だけが一体のものまである。歯根の一部が少なくとも両歯共通になっていること，いいかえると発生期にこの部の上皮鞘が両歯共通になっていたことが特徴である。一般に，癒合部では歯髓腔もひとつになっている。

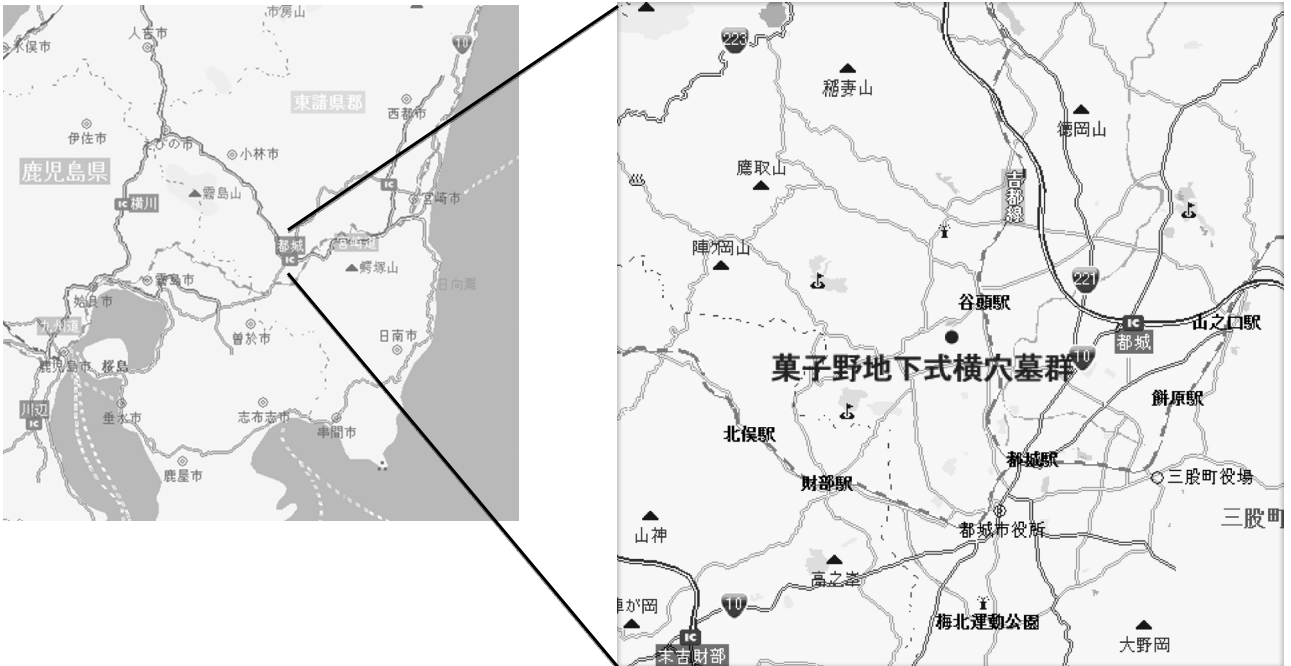


図1 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群の位置



図2 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群 2A号墓, 2B号墓



図3 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群2A号墓玄室内



図4 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群2A号墓1号人骨（男性・壮年）頭蓋

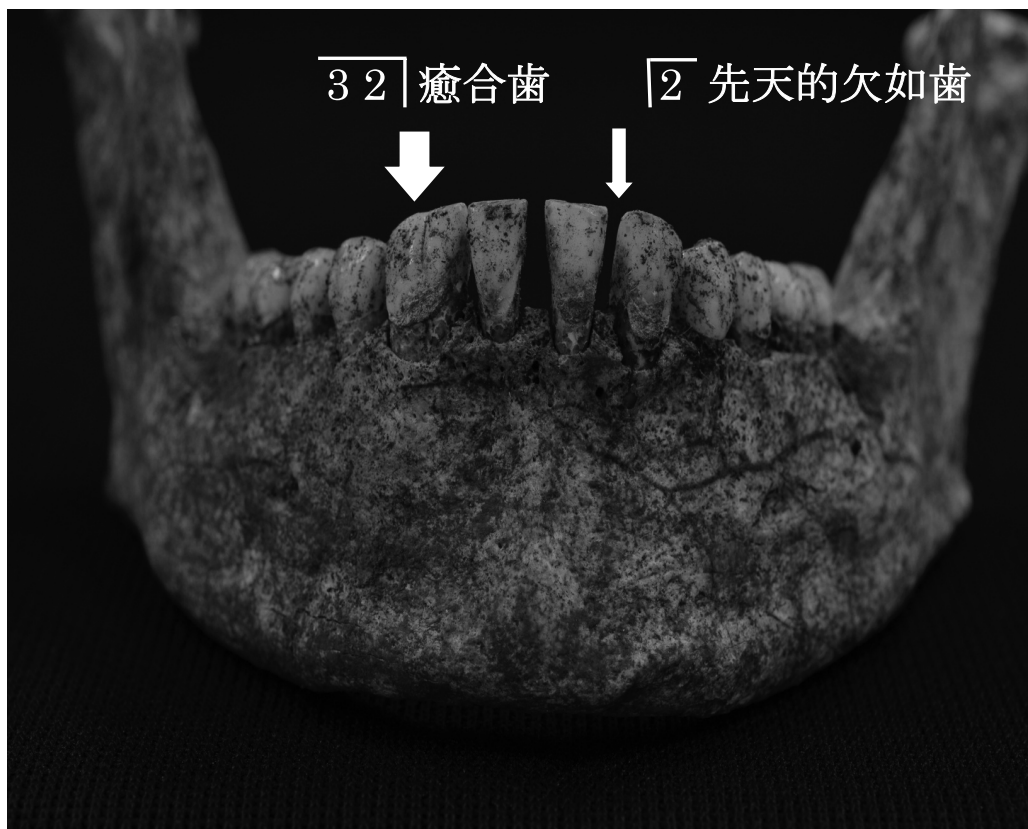


図5 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群 2A号墓 1号人骨 (男性・壮年) 下顎骨

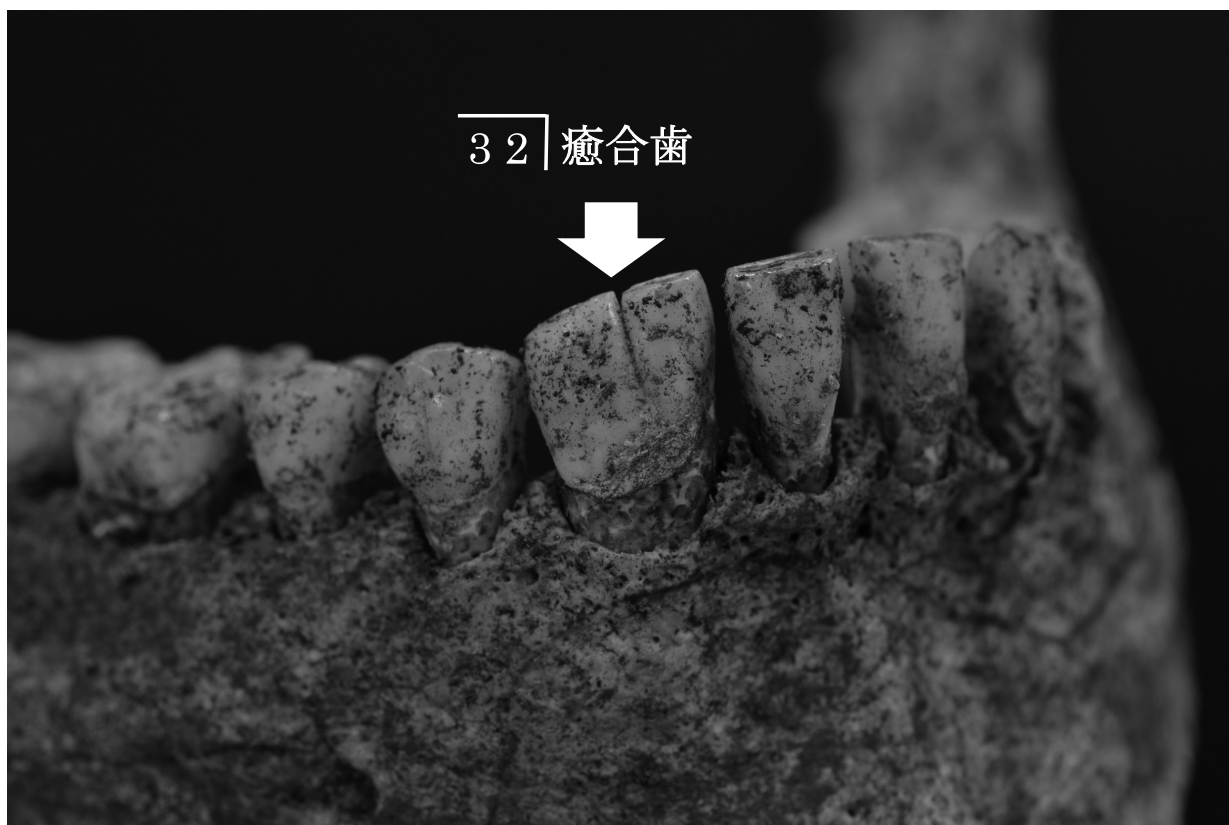


図6 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群 2A号墓 1号人骨 (男性・壮年) に認められた癒合歯 (下顎右側切歯と同右犬歯の間の癒合歯)

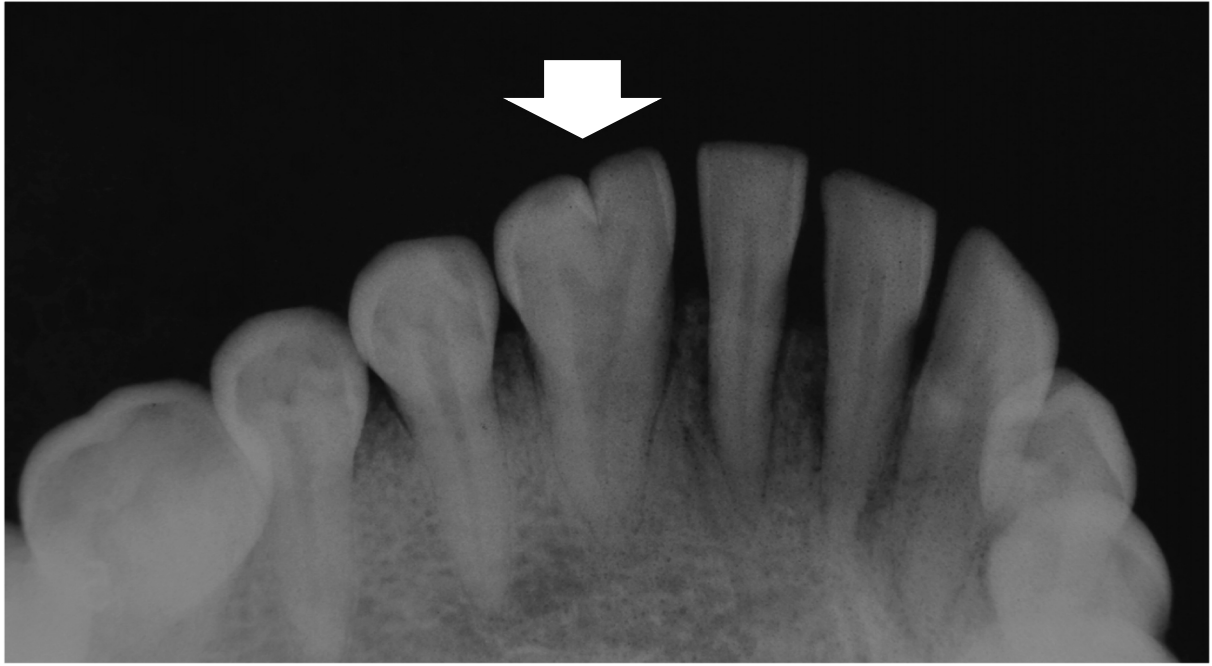


図7 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群2A号墓1号人骨(男性・壮年)に認められた癒合歯のX線写真(下顎右側切歯と同右犬歯の間の癒合歯)

歯髓腔は広い場合が多く、特に歯根部の歯髓にその傾向がみられる。癒合歯は永久歯よりも乳歯に多くみられ、下顎の前歯部が好発部位である。癒合歯は正常歯に起こることが多く、過剰歯との間には比較的少ない。また、上顎歯に認められることは稀である。住谷⁶⁾によれば、下顎前歯部永久歯における癒合歯の出現頻度は0.25% (4,050例中) であり、歯の形態異常の中では出現頻度は高くはない。

癒合歯が疑われる本例の歯冠部は近心側が側切歯の、遠心側が犬歯の形態を持っていることが確認できる(図5・6)。また、X線撮影により歯冠部も歯根部も、歯髓腔は広くはないが、象牙質と歯髓腔が一体になっていることが確認できた(図7)。

癒合歯と鑑別が必要になるのが、癒着歯と双生歯である。癒着歯は一般に象牙質が形成された後のセメント質のみが癒着した歯と定義され、双生歯は正常歯胚とそのそばに発生した過剰歯胚が一緒になった歯であると定義される。本例は、図7のX線写真からも明らかなように、癒合歯の近隣に側切歯や犬歯などの存在はない。また、癒合歯の好発部位とも一致する。したがって、本例は癒着歯でも双生歯でもなく、正常な下顎右側切歯と同右犬歯の間に生じた癒合歯であると診断される。

日本列島から出土した古人骨において、これまで癒合歯が報告された例を我々はまだ知らない。現代日本人の癒合歯の出現頻度^{1)~6)}は、乳歯で約2~5%の出現頻度しかなく、永久歯では0.25%しかないわけであり、古人骨においては稀な歯の形成異常例となろう。

・下顎左側切歯の先天欠如(図5・8)

肉眼観察では下顎左側切歯の存在すべき歯槽部に骨吸収や病的痕跡は認められない(図5)。また、X線写真でも、下顎左側切歯の埋伏は認められない(図8)。したがって、本下顎左側切歯は

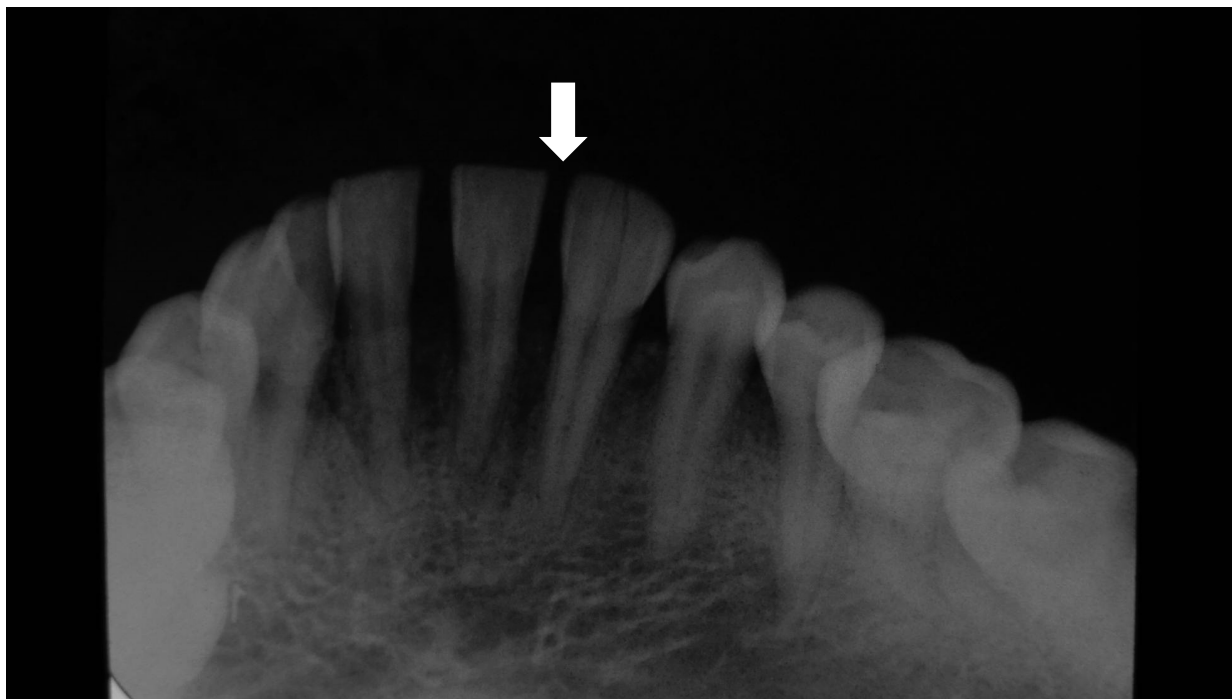


図8 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群2A号墓1号人骨(男性・壮年)に認められた先天的欠如歯(下顎左側切歯)

先天的欠如歯である。

歯の欠如は歯胚の発育・増殖の途中で、何らかの障害により生じるといわれている。永久歯におけるその出現頻度は2～8%で、男女間に頻度の差はなく、上顎より下顎に出現例が多いとされる。下顎では第二小臼歯について、側切歯に多いと報告されている。

先天性欠如や癒合歯の生じる要因として、系統発生学的退化現象、遺伝説、全身あるいは局所的疾患や胎生期の母体の障害等が考えられている。下顎乳側切歯と同乳犬歯の癒合歯の後継永久歯は側切歯か犬歯のどちらかが欠如する例が多いことが報告されており、この点を考慮すると、菓子野2011-2A号墓1号人骨(男性・壮年)の下顎左乳側切歯と同左乳犬歯は癒合歯であった可能性も考えられる。

引用文献

- 1) 森主宜延・沢野宗重・植田正光他：乳歯ならびに乳歯列にみられる以上の疫学的研究(その1)。日歯評論, 367: 136-142. 1973.
- 2) 石田良介・三島賢郎・足立ちあき他：歯牙硬組織の発育と障害に関する研究。小児歯誌, 28: 466-485. 1990.
- 3) 四本真規・波多野浩道・井上昌一：乳歯の先天欠如と癒合歯の発現頻度。口腔衛生会誌, 41: 454-455. 1991.
- 4) 山田 茂：歯数並びに形態の異常が歯列、咬合に及ぼす影響に就いて。臨床歯科, 13: 160-183. 1941.
- 5) 斉藤利世：永久歯の前歯部における癒合歯について。歯界展望, 16: 685-692. 1959.
- 6) 住谷 靖：日本人における歯の異常の統計的観察。人類誌, 67: 215-233. 1959.

(2012年12月7日 受理)